みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

資源とゴミのあいだ (私のスケッチ・ブック (4))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005887

私のスケッチ・ブック(4)

資源とゴミのあいだ

国立民族学博物館
森　明子

◆ゴミとは

現代の私たちが、ゴミといってまず思い浮かべるのは「ゴミ出し」だろう。「資源ゴミ」「燃えないゴミ」などの語がそれにつづく。これらのゴミは「不要なもの、捨てるべきもの」を意味している。ここでいうゴミとは、個々の対象についてその価値を判断し、有用性がきわめて低いか、ゼロとされるものを、ひとつの範疇として認識する概念である。

ただしゴミは、もとからこのような複雑な概念であったわけではなく、本来、具体的な指示対象をもつ語であった。『広辞苑』（第4版1991年発行）には、

ごみ【塵・芥】1．濁水にとけて混じっている泥。2．ちり。あくた。ほこり。また、つまらないもの。無用のもの。

とあって、現在私たちが使っている意味は、最後に、派生的にあらわれているにすぎない。

現代の私たちにとって、ゴミが重大な関心事になっていることは改めていうまでもない。この私たちの時代意識が、日本語の実践的な意味を、これほど展開させているのである。

ゴミが指示する対象や、社会に占めるその位置づけについて考えてみたい。

◆分類の思考

「ゴミ箱」と「くずかご」は、微妙に響きが違う。前者は、小学校の教室にあったものの呼び方として、いちばんしっくりする。小学校の教室のゴミ箱には、ほうきとちりとりで集めた「ちり、あくた」を入れて、そうじ当番が焼却炉まで運んだ。

家の居間にあるものは、ゴミ箱というよりは「くずかご」がふさわしい。そこには、ちり紙や書き損じなどの紙類がおもにおさまる。これに対して、台所には生ゴミを入れる容器があって、これもゴミ箱よりは「生ゴミ入れ」と呼ぶほうがしっくりする。「くずかご」と「生ゴミ入れ」の区別は、家庭内における住居空間の意味と結びついている。

では、家庭にゴミ箱はないのだろうか。今ではほとんど見ないが、かつては、木造家屋の塀際に板でできた箱があって、「ちり、あくた」を入れてゴミ箱と呼んでいたように記憶する。現在では、家庭内の塵は、ほうきではなく、電気掃除機が吸い取ってしまい、庭箒で玄関前を掃いても、集めたものは、生ゴミなどといっしょに回収することが多いようだ。ちり、あくたを入れるゴミ箱の影が薄くなっているのは、こんな事情によるのだろう。

ところで最近では、これらとは違う用語が家庭内に侵入している。「燃えるゴミ」「燃えないゴミ」「資源ゴミ」などである。これらの言葉の前では、「生ゴミ」や「紙くず」さえも押され気味である。

ゴミについての新しい言葉は、行政サービ

スとともに家庭内に侵入してきた。それぞれの範疇は、回収日と結びついていて、それが曜日によって決められている。いったんその回収日をはずすと、次の回収日まで待っていなければならない。住民にとって、行政がつくるゴミの範疇が、重要な理由である。

さて、「資源ゴミ」はさらに、ビン、カン、古紙、段ボールと小分類されるのがふつうだろう。さらに「小型危険ゴミ」、「大型ゴミ」などという範疇があるが、分類の範疇は、自治体によってさまざまで、とても把握しきれない。それは、私たちの身体になじむ分類の程度を超えていて、単なる行政語といってもいいほどだ。ゴミ回収日に、毎回、行政から配布された「ゴミ出しのしおり」に目をやっている人は、少なくないだろう。

◆「資源ゴミ」の成立

ゴミの意味が、「ちり、あくた」であろうと、現代的な「不要物」であろうと、ゴミは資源と矛盾する。資源とは、生産活動のもとになる物質や力を意味する語である。「資源ゴミ」という概念は、現代世界の産物で、タイムマシンに乗って、過去や未来の地球人に会うとしたら、私たちは「資源ゴミ」という語を、説明しなければならないだろう。資源ゴミとは、資源として有用ではあるが、自分では役立てることができない人間のつくった概念で、不要の製品を、製品となる一、二歩手前までもどし、再加工して製品にする試みを指している。これによって、原料を初めから加工するエネルギーを節約し、ゴミ（廃棄物）の量を減らそうとするのである。

住民の側からみると、ゴミも資源ゴミも家庭の外に排出することから、ひとしくゴミであるが、資源としてみるなら、資源ゴミはシステムの中に取り込んで生かすもの、ゴミはシステムの外に追い出してしまうものである。ゴミを、システムの外に追い出す方法として、私たちは、燃やして大気中にばらまいて目にみえなくするか、土あるいは海に沈めて目にみえなくする。「資源（ゴミ）」が、「ちり、あくた」と同列におかれるゴミでないのは、あきらかである。「資源ゴミ」という概念を身につけるためには、その資源としての循環のシステムを、理解することが不可欠である。

◆資源の循環という考え方

私たちの社会では、この資源の循環システムが、住民にほとんど見えないことが問題だと思う。ペットボトルを例にとると、「ラベル紙をはがし、ふたはとる」というきまりは、資源循環のシステムを理解したときに初めて意味をなす。ビンとカンを分別しても、カンを運ぶためのビニール袋を一緒に回収すれば、分別の意味は半減する。しかし、そのような分別がどれほど無駄で、結局は高くつくのかということは、資源循環が住民の目に見えてこないかぎり、改善されないだろう。

私はこの循環システムこそ、子供の頃からしっかり理解し、身につけておくべき事柄だと思う。生まれたときから都市環境に生活している子供たちにとって、それは理科であり、同時に社会科でもあるはずだ。環境という問題領域は、高度な専門知識の領域であると同時に、市民社会のモラルにも通じている。

自治体によって、資源ゴミの範疇が異なるという現状は、自治体の廃品処理能力によっていて、それは自治体の財政事情によるという。そうなると、子供に対して、自治体ごとに異なる教育が行われなければならないのだろうか。小学校で、身のまわりのゴミにも広がる環境の問題をきちんと教育できない一つの要因は、こんなところにもあるだろう。しかし、このような大切な事柄が、個々の自治体の財政力に左右されてよいとも思われない。

◆ヨーロッパの都市のこころみ

「資源ゴミ」は資源であって、ゴミではないこと、生ゴミや紙くずのゴミとは違う枠組みに置かれるということを、日々のゴミ出しに追われている私たちは、忘れがちである。

しかし、ヨーロッパの都市には、日々の生活の中で、資源ゴミを別の枠組みに置く工夫が見られる。街角に置かれた「資源ゴミ」のための回収のしくみで、利用者はいつでも、自分の都合のよいときに、そこに資源ゴミを持っていけばよい。ただし、異物を入れることは許されない。ビンを袋に入れて運ぼうが、1本だけ手で持って行こうがかまわないが、運搬に使った袋は自分で処理する。いつでも回収してもらえるということは、異物を入れない、というモラルを守るのに有効である。

この回収の設備は、決して人目をはばかるのではなく、むしろそのユニークなデザインによって存在を主張していて、都市の景観の一部を構成しようとしている。また、ひとつの都市の中でも、いくつかのバリエーションがある。たとえば、ドイツのベルリンで目にしたものと、フランスのリヨンで目にしたものの違いは、それぞれの国の工芸デザインやファッションの伝統を彷彿させる。

ベルリンでは、ひじょうに大きなビンの形をデフォルメしたコンテナが、街路に三つほど並んでいる。それぞれ茶色、緑色、白で、これらの中は、それぞれの色にあわせてビンを入れることになっている。このようなビン回収システムが発達したのには、ライフスタイルにみあった事情がある。

図1　ブリュッセルの街角に置かれたビン回収コンテナ（写真提供：社団法人プラスチック処理促進協会）

ビールやミネラルウォーターのビンは、回収されて再利用されるが、ワインのビンは多様でそのまま再利用されることはない。ワインが多く飲まれるヨーロッパで、そのビンの再利用が課題になる。そこで、ガラスとして再利用するが、それには色の分別が重要な条件になる。そこで、このように愉快でシンプルなコンテナが誕生したわけである。

リヨンでも分別回収を行っているが、そのデザインは異なる。リヨンでは、曲線が印象的な淡いベージュのコンテナが街角に置かれ、それぞれには彩色絵が付されている。このコンテナは大型で、隠すことはできないが、その柔らかな曲線と色合いが、都市の景観の中でむしろその存在を主張しているといえる。

ベルギーのブリュッセルのビン回収コンテナは、ベルリンのものと似ている（図1参照）。

デザイン性に富んだコンテナがある一方で、ドイツやオーストリアの街角には、機能性を追及したコンテナの列も見られる（図2参照）。分別内容を示した同形の大型コンテナが並んでいる風景は、デザイン美はないが、機能を追及した迫力がある。

このような「資源ゴミ」回収の装置は、視覚的にも、また、ゴミ出しを1週間ごとのカレンダーで区切っている身体のリズムという側面からも、現代の日本人が意識するゴミの範疇を脱しているといえよう。日本の都市では、「燃えるゴミ」であろうと「資源ゴミ」であろうと、回収されたあと、隣組の掃除当番が、ついさっきまでそこにゴミの山があったことを恥じるように、跡形もなく掃除することになっているのである。

◆ゴミを資源へ結ぶ

好むと好まざるとにかかわらず、現代世界に生きる私たちは、資源の意味を認識し、資源の循環という考え方を身につける必要がある。ゴミについても、生活世界の外側の見えないところに追いやるのではなく、資源の循環の中に位置づけて、いかに生かされるのか、生かされない部分がどの程度で、その廃棄はどのようになされるのかを見極めていかなければならないだろう。

このような意味で、住民の生活世界の見えるところに、「資源ゴミ」を位置づけようとするヨーロッパの都市の工夫は有効であるし、何よりも生活を楽しむ知恵に満ちた、魅力ある行いであるように私には思われた。

ところで、ゴミとカタカナで書くことについて、この小文の執筆中に、環境問題に取り組んでおられる方から「カタカナで書くと、ゴミをとくにイヤなものとして捉えていると考えられ、ごみと書くのが普通です」という意見をいただいた。ご意見を寄せてくださったことにお礼を申し上げる。

私自身は、カタカナで書くことに否定的なイメージがついてまわるとは思っていなかったので、この意見には少なからず驚いた。カタカナ表記には、他と区別する機能はある。外来語をカタカナ表記にするのはそのためだし、私たち研究者は、特定の専門用語にしばしばカタカナを使う。しかし、カタカナ表記は、本来、語そのものに価値を付与するものではない(意見を寄せられた方は、イヤもカタカナにされていたが)。カタカナで表記された語を否定的と捉えるのは、情報の受け手が本来持っている価値観によっている。

「ゴミ」と表記すると、「イヤなものと捉えている」と考えるならば、それは情報の受け手自身が「ごみ」に対してあらかじめもつ価値の投影と考えられる。恐らく、ご意見を下さった方は、環境問題に取り組む過程で、多くの人々があらかじめもっている「ごみ」に対する否定的な価値を、取り除く必要があると考えておられるのだろう。「ごみ」は私たちの日常生活の一部であるから、とりたてて否定的なものと考えるべきではない、だから、他のものと差別しないで同じ目の高さで見ることが大切だ、とお考えなのではなかろうか。

図2 ドイツ、ライプツィヒのゴミコンテナ
一般、古紙、ビン(緑色、茶色、白色)が区分されている。(写真提供:ドイツ観光局)

このような考え方を私は立派だと思う。それと同時に、「ごみ」に対する別の視線があること、そういう視線がヨーロッパの都市に見られることを、私は小文で紹介したいと思った。それが「ごみ」を隠すのではなく、公的な生活空間の一角に位置づけようとする姿勢だった。強いていえば「ごみ」の存在をきわだたせる、「ごみ」の輪郭を描くような態度である。

どちらが優れているというわけではない。街角に目立つ「ゴミ回収」システムを置く発想はカタカナ表記に、「ごみ回収」のあとを掃き清める営みは、カタカナを拒否する態度に通じると思われる。「ゴミ」をどう表記するか、私自身はカタカナでもひらがなでも大きな違いはないと思うが、カタカナ表記への拒否反応は、小文の意図したことと大いにかかわるので、あえて紹介させていただいた。